

第10章 中国の少数民族

著者	若林 敬子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	研究双書
シリーズ番号	414
雑誌名	中国の人口変動
ページ	259-286
発行年	1992
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00013487

第10章

中国の少数民族

序—1987年中間センサスまでの概況

1. 居住分布上の特色

中国の少数民族の人口は、比率でこそ全国人口の8.0%（1987年中間人口センサス）にすぎないが、中国人口問題の多様性の理解にあたってきた重要な意味あいをもっている。つまり多民族国家であって55の少数民族が存在することの意味は、その居住分布、宗教、婚姻習俗がいかに関人口動態に影響を与えるか、人口社会学的にはきわめて興味ある問題である。しかし、同時に人口統計的にはいくつかの注意事項を念頭におかなくては理解できない実情もあるのでここで簡述しておこう。

少数民族は国境地帯に居住し、民族によっては国境を越えて分断されていること（例えば、^{カザフ}ハザク族、蒙古族等は旧ソビエトやモンゴル人民共和国と分断されている。また、^{キルギス}キルギス族はソビエトではナナイ族ともよばれる）もあり、その人口数を正確に把握することはなかなか容易ではない。

人民共和国が統合された当初、少数民族は35民族、3600万人が識別されていた。ついで1953年第1回人口センサス時には41民族、3532万人（全人口の6.06%）、64年第2回人口センサス時には53民族、3992万人（5.78%）、78年調査で5580万人（5.80%）、82年第3回人口センサスで6723万人（6.70%）、87年

第1表 少数民族の人口推移と文盲率・半文盲率

民 族 名	おもな居住地区	人 口			1953年人口を100とした82年の指数	1982年12歳以上文盲・半文盲率(%)		
		1953年	1964年	1978年		1982年	計	男、女
		万人	万人	万人	人	人		
チワン(壮)族	広西(91.4%)	696.0	8,386.140	1,209.0	13,378,162	15,489,630	192.2	31.36 15.73 46.97
回族	寧夏(17.7%), 甘肅(12.7%)	356.0	4,473.147	649.0	7,219,352	8,602,978	202.8	41.22 29.73 53.01
ウイグル(維吾爾)族	新疆(99.7%)	364.0	3,996.311	548.0	5,957,112	7,214,431	163.7	42.12 38.70 45.76
イ(彝)族	雲南(61.7%), 四川(27.1%)	325.0	3,380,960	485.0	5,453,448	6,572,173	167.8	61.56 45.68 77.64
ミャオ(苗)族	貴州(49.8%), 湖南(21.0%)	251.0	2,782,088	392.0	5,030,897	7,398,035	200.4	58.02 39.48 77.48
満 族	遼寧(50.4%), 河北(17.6%)	242.0	2,695,675	265.0	4,299,159	9,821,180	177.7	17.03 11.78 23.27
チベット(藏)族	チベット(45.6%), 四川(23.7%)	277.0	2,501,174	345.0	3,870,068	4,593,330	139.7	74.83 61.39 87.22
モンゴル(蒙古)族	内蒙古(70.2%), 遼寧(12.2%)	146.0	1,965,766	266.0	3,411,657	4,806,849	233.7	28.55 21.09 36.65
トウチヤ(土家)族	湖南(31.5%), 湖北(31.0%)	59.0	524,755	77.0	2,832,743	5,704,223	480.0	33.41 19.93 48.19
ブイ(布依)族	貴州(97.4%)	125.0	1,348,055	172.0	2,120,469	2,545,059	169.6	55.79 33.78 77.76
朝鮮 族	吉林(61.5%), 黒龍江(23.6%)	112.0	1,339,569	168.0	1,763,870	1,920,597	157.5	10.45 4.67 15.99
トン(侗)族	貴州(55.7%), 湖南(30.0%)	71.0	836,123	111.0	1,425,100	2,514,014	200.7	44.56 25.45 66.64
ヤオ(瑤)族	広西(62.1%), 湖南(21.5%)	67.0	857,285	124.0	1,402,676	2,134,013	209.4	47.73 31.55 64.77
ベー(白)族	雲南(84.0%)	57.0	706,623	105.0	1,131,124	1,594,827	198.4	40.76 20.35 60.70
ハニ(哈尼)族	雲南(99.5%)	48.0	628,727	96.0	1,058,836	1,253,952	220.6	70.05 56.25 84.15
カザフ(哈薩克)族	新疆(91.6%)	50.9	491,637	80.0	907,582	1,111,718	178.3	22.14 16.76 27.88
タイ(傣)族	雲南(99.9%)	47.0	555,839	76.0	839,797	1,025,128	178.7	57.19 45.07 69.12
リー(黎)族	海南(91.8%)	36.0	438,813	68.0	817,562	1,110,900	227.1	41.49 27.40 55.65
リス(傣)族	雲南(96.9%)	31.7	270,628	47.0	480,960	574,856	151.7	71.92 58.55 85.09
シェ(舍)族	福建(54.9%), 浙江(27.4%)	21.9	234,167	33.0	368,832	630,378	168.4	51.47 35.17 70.37
ラフ(拉祜)族	雲南(99.2%)	13.9	191,241	27.0	304,174	411,476	218.8	82.31 77.71 86.98
ワ(佤)族	雲南(98.8%)	28.6	200,272	26.0	298,591	351,974	104.4	68.61 58.67 78.61
スイ(水)族	貴州(93.2%)	13.3	156,099	23.0	286,487	345,993	215.4	61.63 38.69 85.78
トンシヤン(東郷)族	甘肅(83.3%), 新疆(15.1%)	15.5	147,443	19.0	279,397	373,872	186.7	86.91 77.92 96.41
ナシ(納西)族	雲南(95.6%)	14.3	156,796	23.0	245,154	278,009	171.4	38.10 23.82 52.62
トウ(土)族	青海(85.0%), 甘肅(11.1%)	5.3	77,349	12.0	159,426	191,624	300.8	60.17 42.04 79.47
キルギス(柯爾克孜)族	新疆(98.8%)	7.0	70,151	9.7	113,999	141,549	162.9	41.09 31.98 50.64
チャン(羌)族	四川(99.0%)	3.5	49,105	8.5	102,768	198,252	293.6	50.69 32.87 68.46

ダール(達斡爾)族	4.4	63,394	7.8	94,014	121,357	213.7	18.45	15.91	21.19
チンポー(景頗)族	10.0	57,762	8.3	93,008	119,209	93.0	63.02	54.39	70.82
ムーラオ(佤)族	4.3	52,819	7.3	90,426	159,328	210.3	34.67	18.61	50.41
シボ(錫伯)族	1.9	33,438	4.4	83,629	172,847	440.2	10.97	7.38	15.39
サラ(撒拉)族	3.0	34,664	5.6	69,102	87,697	230.3	72.04	51.54	93.91
ブーラン(布朗)族	3.5	39,411	5.2	58,476	82,280	167.1	71.50	61.84	81.38
コーラオ(佤)族	2.0	26,852	2.6	53,802	269.0	269.0	54.95	37.29	74.10
マオナン(毛難)族	1.8	22,382	3.1	38,135	71,968	211.9	31.34	20.00	42.33
タジク(塔吉克)族	1.4	16,236	2.2	26,503	33,538	189.3	42.83	33.09	54.13
ブミ(普米)族	1.2	14,298	2.2	24,237	29,657	202.0	60.27	42.38	79.04
ヌー(怒)族	1.2	15,047	1.9	23,166	27,123	193.1	65.92	58.54	72.74
アチャン(阿昌)族	1.7	12,032	1.8	20,441	27,708	120.2	59.83	41.98	77.42
エヴェンキ(鄂温克)族	0.62	9,681	1.3	19,343	26,315	312.0	16.27	13.00	19.93
ウスベク(烏孜别克)族	1.3	7,717	0.75	12,453	14,502	95.8	19.58	17.25	21.93
トアン(德昂)族*	0.29	7,261	1.0	12,295	15,462	424.0	72.92	60.27	86.63
キン(京)族	0.43	4,293	0.54	11,995	18,915	278.9	36.87	17.11	52.42
ジノー(基諾)族	—	—	1.0	11,974	18,021	—	53.74	44.92	61.37
ユーズ(裕固)族	0.38	5,717	0.88	10,569	12,297	278.1	37.33	20.72	54.00
ボウナン(保安)族	0.49	5,125	0.68	9,027	12,212	184.2	74.06	55.74	93.16
メンババ(門巴)族	—	3,809	約4.0	6,248	7,475	—	43.84	28.57	57.89
トールン(独竜)族	0.24	3,090	0.41	4,682	5,816	195.1	49.27	43.56	57.66
オロチョン(鄂倫春)族	0.22	2,709	0.32	4,132	6,965	187.8	22.60	22.97	22.22
タタール(塔塔爾)族	0.69	2,294	0.29	4,127	4,873	59.8	8.97	7.59	10.53
オロス(俄羅斯)族	2.2	1,326	0.06	2,935	13,504	13.3	15.00	5.48	19.73
ロツバ(珞巴)族	—	—	約20.0	2,065	2,312	—	82.43	82.86	82.05
カオシヤン(高山)族	—	366	約30.0	1,549	2,909	—	24.46	13.33	37.50
ホジェン(赫哲)族	0.045	718	0.08	1,476	4,245	328.0	14.29	—	25.93
また識別されていない民族	32,411	879,201	749,341	60.90	40.09	82.07	—	—	—
計	35,320,330	39,923,736	5,580万人	67,233,254	91,200,314	189.3	42.63	29.71	55.97
(全人口に占める割合)	(6.06%)	(5.78%)	(5.80%)	(6.7%)	(8.04%)	—	—	—	—

(注)おもな居住地区の%は、その少数民族全人口に対する地区居住人口の割合(1990年)。

*1985年に「バラウン(崩竜)族から民族側の要請により改名。

(出所)1978年は国家民族事務委員会発表。他は各人口センサス結果。

中間センサスで8592万人(8.02%)と急増した(ただし、民族として認定されていない時以前の調査ではその民族の人口数は明記されていない点に注意)。

少数民族に対する政策を歴史的にたどると、①1949～57年の「大漢族主義」批判が行われた漸進的民族政策、②58～59年の民族工作の左傾化と「地方民主主義」批判、③60～62年の軌道修正、④62～77年の文化大革命期の民族固有の問題の否定(民族問題は階級問題のひとつであるとされ、宗教の自由も否定され、宗教寺院や村民の信仰である廟や祠も破壊された)、⑤78年12月の3中全会後によりやく民族工作が回復されるという曲折をたどる。

現在5つの自治区があるがその成立時を記せば、内蒙古が最も早くて1947年5月、新疆が55年10月、広西壮族が58年3月、寧夏回族は58年10月、チベットは65年9月である。民族政策の根幹をなす「民族区域自治法」が1984年5月に制定され、国家の統一的指導のもとに各少数民族の集中居住地域が区域自治を実施している。1988年現在、既述の自治区5つの他に自治州30、自治県113(91年には124)の自治地方行政区からなる。その面積は611万8000平方キロメートルで全中国960万平方キロメートルの63.7%、そこでの居住総人口は1億4247万人(全国人口の13.2%)うち少数民族は6253万人(43.9%)に達する。それ以外の少数民族2340万1000人は自治地方以外の漢族と雑散居しており、民族自治権をもっていないことになる。

つまり少数民族の居住状況の特色は、「大雑居・小集居交錯居」といわれるように、①広大な全中国の63.7%の広さに散在し、漢族等の他民族と複雑に雑居している、②1000万人をこす大民族・^{チワン}壮族から1000人強の小民族・^{ホジェン}赫哲族まで多様である、③中国独自の自治を与えられた保護区域に「民族区域自治」がある、④しかしそこにおいても多くの場合、少数民族は依然少数民族であることが多い。

2. 78年以降の急増要因

1982年人口センサスの結果(87年中間人口センサスは1%調査のため少数の民

族については若干疑問を感じるため、82年値で述べると)、少数民族55の中で、最大は広西自治区に多く住む^{チワン}壮族で1338万人、最小は黒龍江省に住む^{ホジェン}赫哲族の1476人である。100万人以上が15民族、10万～100万人が13民族、1万～10万人が18民族、1万人未満が9民族というように、人口規模においてかなりのバラツキがある(第1表参照)。

漢族と少数民族の人口増加率についてみると、1953～64年に漢族は年平均1.59%の増加に対し、少数民族は1.11%の増加にすぎなかった。1964～82年の間では逆転し、漢族の平均2.04%増加に比し、少数民族は2.94%の増加となっている。とりわけ、1978年の5580万人から82年の6723万人、さらに87年の8592万6800人、90年の9120万314人へと、少数民族の急増が著しい(第2表参照)。

その要因は、既述の歴史的政策の転換、特に1978年以降の少数民族への特別の保護と特権が積極的に与えられることになったためと説明できよう。

具体的には第1に、計画出産の実行についてで、少数民族には第2子、場合により3子以上の出産が認められていることがあり、出生児数の緩和と法定結婚年齢の2歳引下げが行われている。従って、両者間(漢族と少数民族)

第2表 少数民族の各期別人口増加状況

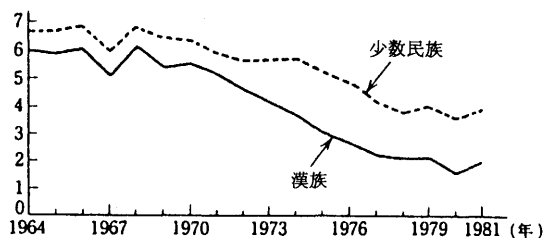
(%)

時 期	年平均自然増加率	
	少数民族人口	全国人口
1949～53年	1.93	2.07
53～64年	1.08	1.66
64～78年	2.41	2.22
78～80年	5.31	1.27
78～82年	4.71	0.80

- (注) 1953～64年の少数民族は年平均1.11%、漢族は1.59%。
 1964～82年の少数民族は年平均2.94%、漢族は2.04%。
 1982～90年の少数民族年平均増加率は3.87%。

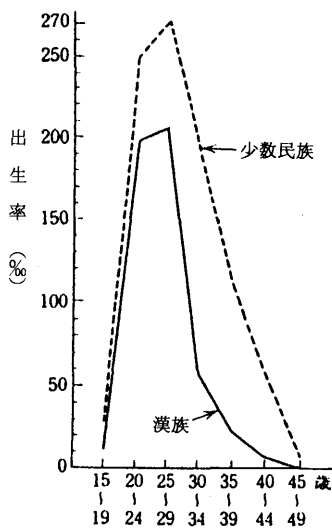
(出所) 張天路「民族演變過程—影響民族人口變動的一個重要要素—」
 (『西南民族学院学報』1982年第1号)
 熊郁「少数民族人口の発展」(『当代中国の人口』北京 中国社会科学出版社 1988年)

第1図 少数民族・漢族別合計特殊出生率の推移



(出所)張天路『中国少数民族の人口』瀋陽 遼寧人民出版社 1987年 28ページ, 1982年の1000分の1出産力標本調査による。

第2図 少数民族・漢族別年齢階級別出生率(1981年)



(出所)第1図と同じ (35ページ)

に合計特殊出生率でいうと全国農村の漢族は1980年2.35, 81年2.76に対し, 少数民族は各4.36, 5.05と倍近い差がある。女子初婚年齢では, 1982年値で漢族22.81歳, 少数民族20.96歳と両者に1.85歳(年)の差がある。このように, 1979年以降の一人っ子政策が少数民族には対象外とされていることによ

る出生率それ自体の差がある（第1図、第2図参照）。

第2は、漢族と少数民族間の「通婚」ケースが増える傾向にあるが、その間に生まれた子供は大部分少数民族を名のために相対的に数が膨張している。少数民族への優遇政策により、実質的差別の状態から政治的・社会的・経済的地位の向上、自主権の拡大が図られてきたことによる。具体的には、①計画出産の制限緩和、②上級学校への進学時の点数の有利な取り計らい、③寄宿料や奨学金の優遇、④就職しやすく幹部にもなりやすい、⑤経済的に上のせ手当の支給（例えば回族に対する肉購入）などである。

第3は、1978年以前には、少数民族であることを軽蔑され、恥ずかしいと広くうけとめられていたために、出自を隠し、漢族として隠れていた少数民族が正式に“集团的”に表明申告したためによるカウント上の増加である。1978年以降民族籍が改められたのは260万人で、その大半が漢族から少数民族への移行であった。78～90年まで3540万人の純増のうち約半数が戸籍変更による増加である。これは82年人口センサスの実施を前にして、「民族の回復あるいは改正原則に関する通知」が81年にだされ「返祖帰宗」（祖先・宗族に帰る）の原則による変更である。

例えば満族は、社会的差別を恐れて漢族として申告していたのが、申告をしなおしたために、1978年265万人が、82年に430万人、87年に917万人へと急増した。他にも同様の例が多い。

民族識別工作は現在なお流動的であり、1982年でいけばなお87万9000人（90年センサスでは74万9341人）の非漢民族が識別されていない。

3. 宗教・婚姻習俗等の多様性と出生率の差

第7次5カ年計画の中に「少数民族の人口に関する総合研究」が重点研究項目として位置づけられ、人口と経済社会発展への影響について研究が本格化しつつある。政府は人口抑制が自らの民族の繁栄につながるのだという自覚を浸透させるようにし、直接工作による抵抗を極力さけようとしている。

しかしながら、1985年12月に新疆ウイグル自治区で、ウイグル族がデモを起こした中に「少数民族に対する産児制限強要を撤廃せよ」との要求が掲げられていたように、なお計画出産は受入れ困難な状況下にある。チベットでは、①職員・労働者等漢族都市住民は1子、②農村で実際の困難な状況が確認された者や都市居住の少数民族は2子、③農村の少数民族は3子、④牧業区の少数民族は4子、というように「一二三四政策」がとられている。

また、一般にイスラム教系新疆のウイグル族等は初婚年齢が早く、多産傾向なのに比し、ラマ教系のチベット族らは、晩婚で出生率が低いという傾向がみられる。チベット族人口は、ラマ教による未婚率・不育率の高さが影響し、イスラム教系や雲南省等の民族とはかなり異なる様相が指摘できる。気候や高地という地理条件も、人口の出生率や乳児死亡率に関連しているものと思われ、より多くの研究課題を残しているといえよう¹⁾。

第1節 90年センサス結果にみる人口急増

1990年7月1日に実施された第4回人口センサスの結果、少数民族人口はきわめて注目すべき数字結果となった(第3表参照)。

前1982年センサスと比べ、56民族(漢族を含め)の内、人口100万人以上の民族は16から19に増加した。それらは漢の他、蒙古、回、チベット、ウイグル、^{ミャオ}苗、^イ彝、^{チワン}壮、^{ブイ}布依、^{トン}朝鮮、^{ヤオ}満、^{ペー}侗、^{トウチヤ}瑤、^{ハニ}白、^{ハザク}土家、^{タイ}哈尼、^{リー}哈薩克、^{タイ}黎の諸民族であった。人口10万人以上100万未満の民族は、13から15に増加、^{リス}傈僳、^ワ佤、^{シェ}會、^{ラフ}拉祜、^{スイ}水、^{トンシャン}東郷、^{ナシ}納西、^{チンポー}景頗、^{キル}柯爾克孜、^{ガス}土、^{トウ}達斡爾、^{ムーラオ}么佬、^{チャン}羌、^{コーラオ}仡佬、^シ錫伯の諸民族がこれに含まれ、残りの22民族はいずれも10万人以下である。

センサス結果にみる55少数民族の人口総数は9120万314人で、総人口の8.04%である。1982年の6723万人、6.70%よりも大幅な増加となった。人口増加率は漢族の10.8%に比し35.5%に達した。

1982～90年の8年間に人口が2倍以上に急増した民族をあげてみると、
 コーラオ 仡佬族（貴州省に98.3%が居住）が5万3802人から43万7997人へ8.1倍、
 オロス 俄羅斯族（新疆ウイグルに59.8%）が2935人から1万3504人へ4.6倍、
 ホジョン 赫哲族（黒龍江省に88.3%が居住）が1476人から4245人へ2.9倍、満族（遼寧省に50.4%
 が居住）が430万4160人から982万1180人へ2.3倍、
 シンボ 錫伯族（遼寧省に69.5%が居住）が8万3629人から17万2847人へ2.1倍、
 トウチヤ 土家族（湖南省に31.5%、湖北省に31.0%が居住）が283万4732人から570万4223人へ2.0倍と6つを数える。

このように短期間に急増した要因はもちろん人口動態要因のみでは説明範囲を超えている。なぜなら①一人っ子政策の枠外による出生率が漢民族より高い、②漢族と少数民族間の「通婚」が増大しつつあり、その間に生まれた子供はほとんどが少数民族を名乗ることで相対的に膨張した、からである。

加えて1978年以降、それまで冷遇と軽視を受けることを怖がり、少数民族であることを認めようとせず、出自を隠していた者がなぜ一斉に民族戸籍変更を申告し直したのか。ちなみに中国の民族名は自己申告制であるが、18歳までは親が、それ以降は子供自身が民族を選択・申告できる。

この1978年および82年以降の増大理由は実は手厚い少数民族への優遇政策、とりわけ結婚・出産という再生産年齢に達したとき、厳しい一人っ子政策の枠からはずれ、第2子出産（一部農村では第3子も）が認められるという特典によるものである。また、貴州省をみると1980～85年にかけて積極的・集中的な民族識別工作が省民族事務委員会の中に担当事務室を特別に設置してなされた模様である（80年来、約100の民族自治県が追加されたのは、集団的な戸籍変更によってなされた例が多い。自治県になると補助金や納税上の優遇があるため）。

第3表 少数民族人口(1990年人口センサス結果)

民 族 別		1982年センサス 人口数(人)	1990年センサス 人口数(人)	増加率 %
	漢 族	940,880,121	1,042,482,187	10.80
モンゴル	(蒙 古) 族	3,416,881	4,806,849	40.68
	回 族	7,227,022	8,602,978	19.04
チベット	(藏) 族	3,874,035	4,593,330	18.57
ウイグル	(維 吾 爾) 族	5,962,814	7,214,431	20.99
ミャオ	(苗) 族	5,036,377	7,398,035	46.89
イ	(彝) 族	5,547,251	6,572,173	20.43
チワン	(壮) 族	13,388,118	15,489,630	15.70
ブイ	(布 依) 族	2,122,389	2,545,059	19.91
	朝 鮮 族	1,766,439	1,920,597	8.73
	満 族	4,304,160	9,821,180	128.18
トン	(侗) 族	1,426,335	2,514,014	76.26
ヤオ	(瑶) 族	1,403,664	2,134,013	52.03
ベー	(白) 族	1,132,010	1,594,827	40.88
トウチャ	(土 家) 族	2,834,732	5,704,223	101.23
ハニ	(哈 尼) 族	1,059,404	1,253,952	18.36
カザフ	(哈 薩 克) 族	908,414	1,111,718	22.38
タイ	(傣) 族	840,590	1,025,128	21.95
リー	(黎) 族	818,255	1,110,900	35.76
リス	(傈 僳) 族	480,960	574,856	19.52
ワ	(佤) 族	298,591	351,974	17.88
シェ	(畲) 族	368,832	630,378	70.91
	高 山 族	1,549	2,909	87.80
ラフ	(拉 祜) 族	304,174	411,476	35.28
スイ	(水) 族	286,487	345,993	20.77
トンシャン	(東 郷) 族	279,397	373,872	33.81
ナシ	(納 西) 族	245,154	278,009	13.40
チンポー	(景 頗) 族	93,008	119,209	28.17
キルギス	(柯 爾 克 孜) 族	113,999	141,549	24.17

(注)本表には中国人民解放军現役軍人の数字を含む。

(出所) 国家統計局1990年11月14日統計広報。

民 族 別	1982年センサス	1990年センサス	増加率
	人口数(人)	人口数(人)	%
トウー (土) 族	159,426	191,624	20.20
ダフル (達斡爾) 族	94,014	121,357	29.08
ムーラオ (么佬) 族	90,426	159,328	76.20
チャン (羌) 族	102,768	198,252	92.91
ブーラン (布朗) 族	58,476	82,280	40.71
サラ (撒拉) 族	69,102	87,697	26.91
マオナン (毛難) 族	38,135	71,968	88.72
コーラオ (仡佬) 族	53,802	437,997	714.09
シボ (錫伯) 族	83,629	172,847	106.68
アチャン (阿昌) 族	20,411	27,708	35.55
プミ (普米) 族	24,237	29,657	22.36
タジク (塔吉克) 族	26,503	33,538	26.54
ヌー (怒) 族	23,166	27,123	17.08
ウズベク (烏孜別克) 族	12,453	14,502	16.45
オロス (俄羅斯) 族	2,935	13,504	360.10
エヴェンキ (鄂温克) 族	19,343	26,315	36.04
ドアン (德昂) 族	12,295	15,462	25.76
ボウナン (保安) 族	9,027	12,212	35.28
ユーグ (裕固) 族	10,569	12,297	16.35
キン (京) 族	11,995	18,915	57.79
タタール (塔塔爾) 族	4,127	4,873	18.08
トールン (独竜) 族	4,682	5,816	24.22
オロチョン (鄂倫春) 族	4,132	6,965	68.56
ホジェン (赫哲) 族	1,476	4,245	187.60
メンバ (門巴) 族	6,248	7,475	19.64
ロツバ (珞巴) 族	2,065	2,312	11.96
ジノー (基諾) 族	11,974	18,021	50.50
その他未識別民族	881,838	749,341	
帰化外国人	4,842	3,421	
総 計	1,008,175,288	1,133,682,501	12.45

第2節 東北・西南の少数民族の場合

《オロチョン族》

筆者は1990年夏、黒龍江省のソビエト国境沿いに居住する^{オロチョン}鄂倫春族、^{ネジュン}赫哲族、^{ダフル}達斡爾族、北朝鮮国境沿いの吉林省延辺の朝鮮族、遼寧省の^{シボ}満族、錫伯族を調査した。松花江の水源地＝長白山天池から吉林市、ハルビン市、^{ジャムス}佳木斯を下り、黒龍江（アムール川）と合流する同江市までを辿り、他方、中ソを分かつ黒龍江とは黒河・愛輝で接するその支流＝^{フアベラ}法別拉川流域でオロチョン族郷、などを訪問した。

黒河・中国最北端の都市は黒龍江対岸のソビエトの都市・ブラゴベンチュンスクと30年ぶりの中ソ貿易で活気づいていた。中国からはスイカがソビエトからは化学肥料が、また1988年9月からは「1日遊」という日帰りツアーが人気を呼び、目前対岸のソビエトをみつつ国境とはなにかをつくづく考えさせられる契機となった。

新生鄂倫春民族郷は、黒河から北西に約100キロメートル白樺山道を走ったところにあった。オロチョン郷は、黒龍江省に5郷、内蒙古自治区に5郷が点在、お互いに馬で数日で移動できる距離であり、たまたま省・自治区の行政上の境界がその間にあるにすぎない。82年人口センサスではオロチョン族の全人口は計4132人を数える（90年センサスでは6965人、68.56%増）。

目が細く頬がふくれた顔立ちは、一目でオロチョン族だと判別できる。1936年に21歳の文化人類学者・泉靖一が調査に入った頃（1943年に第2回調査）はもちろん狩猟生活を営み^{テント}幕居ぐらしであったのが、建国後の1953年から（実際の生活は58年より）国家が無償で住宅を援助供給して定住生活に変わった。

出産は既存の^{テント}幕居内ではできない風習であり、乳児死亡率が高かったこと、その後もマイナス40度前後にもなる冬期に強い度数の酒で、事故やけん

第4表 少数民族への優遇政策（黒龍江省）

A 赫哲（ホジェン）（1982年全国で1,476人） 佳木斯市同行		
1	出産政策＝3子を許可	1980年以来
2	小，中，高校まで無料就学：大学入試では優先許可	1953年～
3	医療費，半額国家負担	1953年～
4	住宅，個人負担30%，国家70%	1986年～
5	漁業隊を組織し，漁業生業ための船を支給	1983年～
6	都市戸籍住民と同様の商品食糧	1953年～
7	個体戸（飲食店，商店）や郷鎮企業の免税	1983年～
8	幹部になりやすく，研修制度もあり	1953年～
B 達斡爾族（ダフル）（1982年全国94,014人） 黒河市坤河達斡爾族滿族郷		
1	大学では1等奨学金（1～4等ある内の最も有利な，月25～30元）	
2	民族中学校あり，年間30元 of 文房具の支給手当，小学校は完全無料	
3	生産資材（農機具，肥料，農薬）の優先的購入	
4	プラス3斤の米が加算供給	
C 鄂倫春族（オロチョン）（1982年全国で4,132人） 黒河市新生鄂倫春族民族郷		
1	出産	3子を許可
2	教育	教育生活手当として，小学生100元，中学生140元が無料教育の上にさらに支給される。
3	医療	無料
4	住宅	1953年 狩猟生活から定住化へ 土づくりの家が国家により支給 1983年 レンガづくりの住宅支給

（出所）筆者の現地調査による。

かによる凍死や自殺，魚つりでおぼれるなどの意外死（不慮の事故）が多く^②，平均寿命は40歳余と低い。定住直後は伝染病や肺結核が25%（現在は0.59%）と高かった。

手厚い優遇政策としては第4表でみるように，子供は3人までの出産を許し，定住化政策により1982年には，53年に建設された住宅をレンガ造り住宅に無償で建て替えた（その結果，郷に入り立派な家は一目でオロチョン族の家とわかり，他の漢族らの住宅より，外観で異なる）。さらに教育費と医療の無料化，大学進学時の有利性（入試点数や奨学金）等があげられる。

その結果，1970年代後半から漢族との通婚が急速に進行しており，1982～

90年のわずか8年間での4132人から6965人への急増はうなづける。

今後10～20年すると、戸籍人口こそオロチョン族を名乗っても、純粹民族の消滅は時間の問題であろう。狩猟と白樺の樹皮という民族独自性がとだえぬ前の早急な調査の必要を感じた。ましてや彼らは言語はあっても文字をもたない民族であり、記録する手段を持っていない（漢族との通婚により話し言葉さえも消滅の危機にある。この点は赫哲族も同様である）。

《ダフル族》

黒河の東南45キロメートルにある坤河達斡爾族滿族郷は、1家族が3つほどの民族から構成される例もめずらしくはなく、郷長のいうように「出産政策はすなわち民族政策である」という感を強くした。

他民族との通婚は伝統的に厳しく禁止されていたのが、1970年代後半から奨励・提唱されるようになり、急速な通婚による人口増加がここにもみられている。漢化が著しくすすむと残された民族としての自覚は結局のところ祭典によるのみといってもいいすぎではない。民族が集合しての祭典「敖包会」（2年に1度開かれる文芸・スポーツ会、赫哲族も3年に1度文芸・スポーツ会「馬日貢」を行う）のみが民族自覚の機会となり、民族独自文化の存続が消えかけているという矛盾を強くした。

《ホジェン族》

佳木斯から三江平原を車で4時間余、同行につく。黒龍江と松花江の合流点は海のように広い河幅となるが、軍艦がただようそこに船で乗り出すと中々緊張緩和によって国境を越えたあたりで対岸監視台のソビエト兵がこちらにむけて手をふってくれた。

ここからさらに東北に車で1時間半、街津口赫哲族郷に着く。赫哲族民族は全中国で1982年の1476人から90年に4245人と2.9倍となった。彼らはかつては少数民族の中で最も少ない人口の民族であったが、90年には珞巴族（2312人）、高山族（2909人）、について3番目の位置にかわった。ソビエトでは

ナナイ族とも、また1937年の泉靖一が調査した当時はゴルジ族ともよませている。中国国内の居住は、ウスリー江も含め3つの大河がまじわる一帯に点在、といっても3郷1村に集中居住している。

この街津口の少数民族人口は、1953年に449人、112戸、64年に462人、170戸、90年7月には582人、169戸に増大した（内訳は赫哲族409人（129戸）、満族153人（36戸）、朝鮮族17人（3戸）、蒙古族3人（1戸）漢族2625人（132戸）を入れると3207人、301戸）。うち赫哲族は12.8％、少数民族すべてを合計しても18.1％（残り81.9％は漢族）である。

漁撈を生業として生魚を食べ、「魚皮韃子族」ともいわれるように衣服に魚皮を用いてきた。冬期は狩猟も行うがここ小興安嶺一帯は獲物が少なくなっている模様である。戦時中の日本軍はソビエトとの交流・情報もれを阻止するために、山中に赫哲族を隔離し集め、山地に「併村」政策をとった。そのために民族人口は一時期半減（1945年には300余人にまで）したこともあるが近年は通婚による漢化が著しい。

優遇政策の内容は、オロチョン族とはほぼ類似しているが、漁業隊への船の供給援助、都市民と同様の商品食糧の供給、郷鎮企業・個体への免税、幹部研修などが加えられていた。

《満族・錫伯族》

遼寧省瀋陽市に近接する鉄嶺市は、満族・錫伯族の集居地区である。この市における満族の人口は1982年の20万4000人から86年の51万3000人へとわずか4年間に2.5倍に、錫伯族については82年の9270人から86年2万2427人へと2.4倍に急増した。

第5・6表でみるように鉄嶺市は1986年に31民族、345万6000人からなるが、うち漢族は283万人（総人口の82％）、少数民族は30民族、62万1000人（総人口の18％）からなる。市域内の開原市についていえば、少数民族の比率は54.5％、西豊県40.8％からなり最も高い値を占めている。少数民族人口比が30％以上を占める郷鎮は38あり、少数民族人口比が50％以上を占める聚居村

第5表 鉄嶺市建国後の各民族別人口の推移

民 族	人 口 数 (人)				人 口 増 加 (%)				人口に占める比重 (%)					
	1953年	1958年	1964年	1982年	1986年	1953 ～ 58年	1958 ～ 64年	1964 ～ 82年	1982 ～ 86年	1953年	1958年	1964年	1982年	1986年
計	2,086,764	2,303,697	2,421,307	3,379,144	3,456,070	10.4	5.1	39.6	2.3	100	100	100	100	100
漢 族	1,920,144	2,129,631	2,232,321	3,102,272	2,834,416	10.4	5.8	37.7	- 8.6	92.4	92.4	93.0	91.8	82.0
小 計	157,620	174,066	188,851	276,841	621,461	10.4	- 3.0	64.0	124.5	7.6	7.6	7.0	8.2	18.0
満 族	121,203	137,834	129,941	204,030	512,881	13.7	- 6.5	58.2	151.4	5.8	6.0	5.3	6.0	14.8
蒙 古 族	11,712	8,880	13,888	24,072	47,075	- 24.2	56.4	73.3	95.6	0.6	0.4	0.6	0.7	1.4
朝 鮮 族	16,236	18,805	13,404	23,097	23,465	15.8	- 28.7	72.3	1.6	0.8	0.8	0.6	0.7	0.7
錫 伯 族		598	2,087	9,270	22,427		249.0	344.2	141.9		0.03	0.1	0.3	0.6
回 族	8,467	7,906	10,470	16,096	15,224	- 6.4	32.1	53.7	- 5.4	0.4	0.3	0.4	0.5	0.4
そ の 他 族	2	23	61	276	399									

(出所) 「鉄嶺市少数民族人口発展状況簡介」1990年。

第6表 鉄嶺市における各民族人口の分布

県 (市) 区	総 人 口	漢 族	計	少 数 民 族					族			未 識 別 民 族	婦 化 外 国 人
				%	満 族	蒙 古 族	朝 鮮 族	錫 伯 族	回 族	壯 族	そ の 他 族		
計	3,456,070	2,834,416	621,481	18.0	512,891	47,015	23,465	22,427	15,224	120	279	11	162
銀州区	235,816	223,856	11,959	5.1	4,577	684	3,367	274	3,011	11	35		1
清河区	53,019	36,344	16,765	31.6	15,232	125	1,050	152	170	2	17		
鉄法市	181,788	176,413	5,375	3.0	2,855	511	718	117	1,078	5	89		
鉄嶺県	383,817	352,802	31,015	8.1	19,616	759	7,310	2,793	487	30	21		
開原県	576,302	262,121	314,029	54.5	283,115	905	8,854	15,812	5,287	23	32		152
西豊県	335,176	198,365	136,811	40.8	134,246	458	930	112	1,004	10	50		
昌図県	954,335	931,915	22,401	2.3	15,733	5,040	965	216	418	13	16	11	8
康平県	308,399	255,447	52,951	17.2	26,004	26,543	126	50	194	17	9		1
法庫県	427,328	397,153	30,175	7.1	11,493	12,050	145	2,893	3,575	9	24		

(出所) 第5表と同じ

は487ある。

少数民族のうち満族は最も多くて全市で51万2891人、総人口の14.8%を占めるがその中の28万3115人が開原市に、13万4246人は西豊県に居住している。次いで蒙古族は、4万7015人で総人口の1.4%、そのうちの2万6543人は康平県（その西部4民族郷）に、1万2050人は法庫県に住む。全市159の郷鎮に分布、特に法庫県四家子蒙古族郷に集居する。

朝鮮族は2万3465人で総人口の0.7%、全市113の郷鎮に分布、特に開原市開原鎮、八宝屯満族錫伯族朝鮮郷、鉄嶺県腰堡（凡河鎮、双井子郷、銀州区の竜山郷）などに多い。

錫伯族は2万2427人、全市103の郷鎮、開原市西部や鉄嶺県腰堡、鎮西堡鎮、法庫県秀水河子鎮に居住している。その他回族1万5000人がいる。

第5表でみるように、漢族は1953年の192万9000人から86年に283万4000人へ、少数民族は15万8000人から62万1000人へ4倍近い増加となった。ここでは主に1985、86年の2カ年間にまとまって戸籍変更した例が多く、16民族、33万1253人にのぼる。その内訳は満族29万9358人、蒙古族1万476人、錫伯族1万826人、朝鮮族152人、回族95人、壮族45人、その他民族46人であった（鉄嶺市の資料による）。

この遼寧での優遇政策としては、第4表で指摘された以外に、借入金2000元までの利子が半額になること、肥料や農機具などの農業生産必要物質の優先的供給、大豆を生産しない民族郷に対して豆油が供給されるなどが明示されていた（一般に自治県になると、補助金や税上の優遇がある）。

このような少数民族人口のあまりの急増に国家統計局、民族事務委員会、公安部の3省は、1990年7月の人口センサス実施を前にして慎重な態度をとり、民族変更の人口増大をできる限り少なく抑えようとした。つまり「中国公民の民族成分の規定に関して」という通達により89年4月から1年間戸籍変更を凍結し、かつ90年4月以降変更条件をより厳格化（86年以降の戸籍変更者に対しては第2子出産を許さないと。吉林市の『吉林省計画出産条例』貫徹に関する実施細則（草案）』（1988年）によると82年人口センサス以降の民族成分変更者に

は、不適用との規定がある。) する方策に切り換えたのである。

《朝鮮族》

朝鮮半島に隣接した吉林省延辺朝鮮族自治州には、1982年センサスで朝鮮族全人口74万5567人のうち42.7%が居住している。近年は「環日本海時代」をむかえ、北朝鮮が92年7月1日に人口センサスをはじめて実施しようと準備中である。国立人口研究所(洪順源所長)の設立に続き金日成大学でも人口研究所を新設しようとし、今後に大きな開放のうねりの中にある。

ここ和龍県では、ハルピン市医科大学医学人口研究所の董情らが、1983年12月31日時点で死亡についての調査を行った。1983年の和龍県居住の朝鮮族の平均寿命は、65.45歳(男61.51歳、女69.70歳)、同居住の漢族の平均寿命は69.14歳(男67.62歳、女71.19歳)である。両民族の間で3.69歳、特に男子については6.11歳もの大差が判明した。死因別にみると第7表でみるように脳血管病と心臓病において朝鮮族男子の数値が特に高い。

ソビエトにおいて平均寿命の男女差に10歳の差があり、男子が低いのに対してウォッカ・強度の酒類が影響してはいないかといわれるように、中国少

第7表 吉林省延辺朝鮮族自治州和龍県における朝鮮族と漢族の死因・死亡率(1983年)
(単位: 10万対 %)

	朝鮮族				漢族			
	死亡率	男	女	比率	死亡率	男	女	比率
脳血管疾患	229.18	283.89	175.99	29.89	82.36	105.36	58.76	17.15
心臓病	104.47	119.96	89.42	13.63	56.84	51.39	63.46	11.84
悪性腫瘍	80.70	102.44	59.61	10.53	54.52	77.87	30.56	11.35
呼吸器疾患	48.99	54.14	44.00	6.39	52.20	50.39	54.60	10.87
意外死亡	43.95	62.92	25.55	5.73	34.80	52.68	16.45	7.25
消化器疾患	—	51.22	24.13	—	—	18.32	21.15	—
伝染病	—	35.12	24.81	—	—	27.48	18.80	—
平均寿命(歳)	65.45	61.51	69.70	—	69.14	67.62	71.19	—

(出所) 董情ほか「和龍県朝鮮族人口死亡研究」(『中国人口科学』1990年第4期)より作成。

数民族，特に東北の厳冬地域における酒が最も死亡率の高さに関連しているように思われる。西南の酒がコメを原料としてやわらかいのに対し，東北は脳・遺伝的にも影響を与えているとの説がある。オロチョン族で，冬にはマイナス40度にもなる中で，酒による意外死（凍死，けんか，自殺，魚をとりにつけてのおぼれ死，等の不慮の事故）が高いことが指摘されているのと同様である。

《貴州省の土家族，仡佬族，白族》

貴州省は少数民族の人口数からしても，その内実からしても，最も少数民族の影響が強い省のひとつである。

1990年人口センサスの結果は，第8表でみるように全省人口3239万1066人のうち少数民族人口は1123万6546人（全人口の34.69%）を占めており，10万人以上は9つの民族をかぞえる。その第1位は苗族の368万6900人，第2位は

第8表 貴州省における各少数民族人口の推移 （単位：万人，%）

	1949年	1964年	1978年	1982年	1985年	1990年
苗族	132.27	157.91	230.52	258.83	303.75	368.69
布依族	117.62	134.65	189.47	210.01	235.28	247.81
侗族	41.33	47.59	68.22	84.91	111.84	140.03
彝族	28.98	34.52	51.87	56.37	57.49	70.74
水族	13.50	15.31	25.26	27.49	28.04	32.26
回族	3.95	5.47	8.21	10.01	10.21	12.65
瑶族	2.08	1.09	1.64	1.94	2.52	—
仡佬族	1.21	2.62	2.53	5.12	26.60	43.05
壮族	1.00	1.50	2.15	2.77	2.82	—
その他の民族	0.14	0.50	51.70	3.32	73.87	—
未識別	—	3.62	—	74.81	81.78	—
計	347.08 (24.50)	401.16 (22.90)	631.57 (23.51)	742.55 (25.83)	—	1,123.65 (34.69)

（注） 1990年 土家族102.82万人，水族32.26万人，回族12.65万人，白族12.22万人 —は不明
（出所） 1990年センサスは貴州省統計局90年11月8日発表などから作成。

1982年 90年

土家族 1,625人→1,028,189人

仡佬族 51,521人→ 430,519人

白族 4,858人→ 122,166人

布依族の247万8100人、第3位は侗族140万300人の順位である。黔东南苗族侗族自治州、黔西南布依族苗族自治州、黔南布依族苗族自治州に加えて、最も貧しい地方といわれる畢節地区など、生態（水土流出）、貧困、少数民族、人口過剰の諸問題が相互に構造的にからみあい混在している典型地域である。

省民族事務委員会は担当事務室を設けて1980～85年にかけて重点的に民族識別工作を行った。その結果第8表、特にその表下に特記したように、土家族が1982年に1625人にすぎなかったのが8年後の90年には102万8189人に（湖北省長陽県の土家族人口は1964年にわずか4人、82年に29万人、全県人口の70%以上となり自治県成立、その後84年に19万人、90年に21万人と推移した。新しく変わった地方行政指導者により漢族への再変更がなされた地域があるもよう）、仡佬族は5万1521人から43万519人に（貴州省石阡県仡佬自治県の仡佬族人口は82年5.3万人90年43.7万人に急増）、白族は4858人から12万2166人へと急増した。

荒地ではげ山の多い地形を斜面25度の山頂まで、少数民族によって耕地化されている貴州の光景は悲惨なばかりである。水土流出面積は1960年代に3万5000平方キロメートル（全省の20%）、80年代初めに5万平方キロメートル（同28%）、2000年には6万5000平方キロメートル（同39%）にも達しているだろうと予測されている。その最も厳しい地形に少数民族が住んでいるのであり、また「山の上は彝族、中腹は苗族、低地には布依族」といわれるように住み分けられている。

耕地面積でいうと全省で1949年は2697万ムー、62年は3100万ムーで最高値となり88年には2840万ムーに減少している。他方で人口増加が進んだ故に、1人あたり耕地面積でいえば1949年の1.92ムーが、88年に0.90ムーに半減。農業労働力1人あたりは1949年の4.88ムーが88年に1.02ムーに4分の1以下と減った。

貴州の地は雲南と貴州との間に「貴陽静止峰」とよばれる前線が滞留し、「天に3日の晴れ間なく、地に3里の平地なく、人に3分の銀なし」といわれるように、特に冬は晴れわたることはまずない。酸性雨も発生しやすく被害は深刻である（筆者が滞在した15日間雨がふらない日は1日もなかった）。

国務院扶貧弁公室は1985年に全国に年収250元以下の貧困県331を指定して対策にのりだしたが、貧困、生態（水土流失）、少数民族問題、人口急増という悪循環の構図は、そう簡単にはときほぐせない。国務院は全国少数民族地区貧困扶助工作会議で「計画出産活動を少数民族地区の貧困扶助活動の重要任務」として位置づけている。

《布依族》

布依族は、生まれてすぐ結婚相手をきめ（「定親」。母親が子をおぶって男の家にいって結婚式をあげる）、18歳になり夫の家に1泊するが同伴者づれでとまり、平均2.5年ほどしてから妊娠を機にして同居「長住夫家」（夫の家に定住）する。この間別の男性と結婚したくなったら手続きをして、「退婚」（式をあげたのみで同居していないので離婚とは異なる）したりする。このように結婚しても子供が生れるまで数年同居をしないような風習（「不落夫家」という）は、貴州省南部の冊亨や羅甸では今日もなお残存しているし、筆者が調査に入った鎮寧布依族苗族自治県の石頭寨（村）では1970年代前半まで残っていた。北京経済学院人口経済研究所・張天路を中心とした調査が進行中であるが、いずれにせよ初婚年齢の時期をいつとみるか（結婚式の時でなく同居した時期とみるべきというのが張天路の考え）等注意すべきである。

《海南島黎族》

また海南省黎族、特にその典型地域の昌江黎族自治県王下郷では、女子が13歳になる頃までに草ぶき屋根の家のそばに「隆閨」とよばれる小さな家（倉庫の番もかねることもあり）を建て、ダブルベッドをおき男性の夜の訪問が許される。この段階で結婚ではなく、子供を1～2人生んでから結婚する習慣が今日もなお残されている。

第3節 民族別にみた婚姻と出生率

中国人口情報研究センターは8少数民族の婦人の婚姻と出産に関するサンプル調査をまとめた（国家計画生育委員会『少数民族婚姻生育情況系列調査課題』）。

その結果から合計特殊出生率、平均初婚年齢、現存子供の順位別分布の3つの表を紹介してみよう（第9, 10, 11表参照）。

同じ新疆ウイグル自治区に居住するウイグル族でも首都ウルムチ市内に居

第9表 民族別の合計特殊出生率の推移

民族 年	墨玉 維族	ウルムチ 市 維族	コーラオ 仫佬族	トゥチャ 土家族	チャン 羌族	タイ 傣族	ブーラン 布朗族	ジノ 基諾族	ワ 佤族
1968	6.63	4.93	8.31	7.88	7.08	8.31	5.57	5.82	6.05
1969	6.11	3.69	6.96	7.52	6.00	6.24	7.16	7.30	6.94
1970	6.41	5.07	7.69	7.39	6.59	7.14	5.48	6.25	6.82
1971	5.73	4.94	7.20	6.83	6.67	4.66	6.14	6.22	5.28
1972	6.64	4.94	7.33	6.41	6.24	5.55	6.24	6.23	6.47
1973	5.71	4.50	7.33	5.99	6.44	4.91	5.78	6.42	6.39
1974	6.16	4.89	8.69	5.45	6.38	5.32	7.09	6.02	6.66
1975	5.69	4.81	6.82	4.78	6.09	4.21	7.28	5.76	6.56
1976	6.06	4.10	7.63	4.60	6.41	4.46	6.02	3.83	6.65
1977	5.07	4.16	5.57	3.67	4.97	3.42	5.91	3.68	5.67
1978	4.91	3.25	5.45	3.81	4.72	3.61	5.28	3.07	5.40
1979	4.77	2.85	5.16	4.20	4.13	3.38	7.30	3.58	5.23
1980	5.09	2.88	4.74	3.73	4.74	3.03	6.51	3.18	5.30
1981	5.18	2.90	5.29	4.20	4.86	2.94	5.79	2.98	4.90
1982	5.38	2.49	4.96	4.31	4.75	2.77	6.32	3.34	4.81
1983	5.47	2.69	3.83	3.68	3.76	2.86	5.42	3.19	5.17
1984			3.51	3.35	3.75	2.89	6.00	3.15	5.27
1985			3.83	2.91	3.93	3.03	4.75	3.33	4.36

（出所）国家計画生育委員会『八个少数民族婦女婚育情況抽樣調查数据匯編』北京 中国人口情報研究中心編輯出版發行部 1989年。

第10表 9 民族女子の初婚年齢の推移 (歳)

	1950	1955	1960	1965	1970	1975	1980	1985
ウイグル (墨玉)	14.5	14.5	15.0	14.8	14.6	15.3	16.3	(17.3)
ウイグル (ウルムチ市)	16.9	17.0	17.5	20.0	20.4	20.4	21.9	(23.0)
コーラオ (仡佬)	18.8	19.6	20.0	20.1	20.2	20.9	21.7	21.6
トウチャ (土家)	18.9	19.1	19.2	19.3	20.0	21.2	21.8	21.3
タイ (傣)	19.3	19.4	18.3	18.6	18.8	18.7	18.9	20.2
ジノー (基諾)	19.6	21.1	19.2	19.6	18.1	18.8	18.9	19.3
プーラン (布朗)	20.3	18.8	20.3	18.4	18.8	18.2	19.0	19.3
ワ (佤)	18.5	18.7	18.6	18.7	18.0	19.3	19.8	20.3
チャン (羌)	19.1	19.8	20.6	20.6	19.5	20.6	21.5	21.3
全国 (1982)	18.7	19.1	19.6	19.7	20.2	21.7	23.0	

(出所) 第9表と同じ。(注) () は1984年。

第11表 既婚女子の現存子女の順位別分布 (%)

民族 現存 孩次	墨 玉 維 族	ウルム チ市 維 族	コーラオ 仡佬族	トウチャ 土家族	チャン 羌 族	タイ 傣 族	プーラン 布朗族	ジノー 基諾族	ワ 佤 族
無 子	21.2	10.6	6.7	7.3	7.9	8.6	9.6	8.8	9.7
1 子	17.2	17.3	9.1	12.7	11.3	14.1	16.1	15.9	14.5
2 子	16.1	19.0	15.9	19.3	17.7	26.3	18.2	22.4	17.6
3 子	14.2	16.6	21.1	18.9	21.1	19.8	18.1	25.6	20.6
4 子	11.5	14.8	18.1	15.4	18.3	12.2	15.6	12.4	16.5
5 子 以 上	20.6	21.8	28.5	26.4	23.7	19.0	22.4	14.9	21.1
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100

(出所) 第9表と同じ。

住する場合と天山山脈南・南疆の和田地区・墨玉県に居住するウイグル族とは大きな差があることがわかる。ウルムチ市のウイグル族は、合計特殊出生率は1983年に2.69まで低下しているのに比し、墨玉県のウイグル族はなお5.47と高い。平均初婚年齢も、墨玉県では1950年の14.5歳が80年にも16.3歳とあり、同年のウルムチ市のウイグル族の21.9歳と5.6年もの差がある。第11表では子供がないのは21.2%，第5子以上が20.6%も占める。雲南省の傣族，貴州省仡佬族も比較的出生率が高い^③。

第12表 100万以上人口の16民族の女子出生率（1981～86年）

民 族	普通出生率（％）		合計特殊出生率	
	1981年	1986年	1981年	1986年
漢 族	79.8	78.6	2.51	2.29
蒙 古 族	96.7	92.0	3.31	2.58
回 族	94.2	89.3	3.13	2.65
チベット族	76.5(139.8)	122.7	2.77(5.38)	4.43
ウイグル族	167.1	147.0	5.46	4.90
苗族	144.4	115.6	5.34	3.81
彝 族	138.8	117.2	4.85	3.83
壮 族	131.6	117.0	4.64	3.62
布依族	161.9	108.8	5.14	3.98
朝鮮族	66.9	68.5	1.91	1.85
満 族	71.1	90.9	2.10	2.38
侗 族	116.8	101.2	4.45	3.10
瑶 族	149.0	108.4	5.39	3.25
白 族	92.1	94.9	3.33	2.81
土 家 族	95.3	87.4	3.24	2.95
哈 尼 族	158.6	131.8	5.65	3.98

（出所）張天路「少数民族計画生育工作的成就」（『中国計画生育の偉大実践』北京 中国人口出版社 1989年）264～268ページ。

また、張天路「少数民族計画生育工作的成就」（『中国計画生育の偉大実践』中国人口出版社 1989年12月 264～268ページ）によれば朝鮮族は1981年のTFRが1.91、86年が1.85と漢族より低く、哈尼族や布依族の81～86年間の低下が著しい。だがチベット族についてのデータの正確性については標本数から疑問を残している。なお当然のこととして朝鮮族を除く少数民族の年齢構成は漢族より若い（第12、13表）。

第13表 100万以上人口民族の年齢構成（1982～87年）

（％）（歳）

民 族	0～14歳		65歳以上		老年化指数		年齢中位数	
	1982	1987	1982	1987	1982	1987	1982	1987
全 国	33.6	28.8	4.9	5.5	14.6	19.1	22.7	24.1
漢 族	32.2	28.2	4.9	5.8	14.9	20.6	22.9	24.4
蒙 古 族	39.4	36.6	3.4	3.4	8.6	9.3	19.0	20.6
回 族	35.3	33.0	4.2	4.4	11.8	13.3	18.7	22.2
チベット族	39.7	37.2	4.8	4.6	13.1	12.4	19.8	20.7
ウイグル族	40.3	39.4	5.2	4.9	12.9	12.4	19.7	19.7
苗 族	42.4	38.3	4.2	4.3	9.8	11.2	18.8	19.7
彝 族	42.3	38.3	3.9	4.2	9.2	11.0	18.9	19.5
壮 族	38.9	35.6	4.2	5.5	10.7	15.4	19.5	21.3
布依族	39.7	36.0	5.1	5.2	12.8	14.4	19.4	20.9
朝鮮族	28.3	24.7	4.1	4.0	14.5	16.2	24.3	26.8
満 族	33.9	31.5	4.6	4.0	13.5	12.7	21.3	22.5
侗 族	38.6	34.7	4.5	4.3	11.5	12.4	19.4	20.7
瑤 族	40.4	38.0	4.4	4.5	11.0	11.8	18.9	19.9
白 族	38.8	35.3	4.5	5.0	11.6	14.1	19.4	21.2
土 家 族	37.5	32.4	4.6	4.9	12.3	15.1	19.7	21.8
哈 尼 族	42.6	38.0	3.5	3.8	8.1	10.0	18.0	20.3

老年化指数＝（65歳以上／0～14歳）×100

（出所）第12表と同じ。（82・87年とも人口センサス）

おわりに

以上、人口の面からかいまみただけでも55の中国少数民族は一律ではなく、多様である。やや乱暴ながらも人口からみて大分類すると、次のような試みが可能であろう。

第1はイスラム教系民族であり、一般に出生率、離婚率が高く、初婚年齢が低い。それも前表でみたように同じウイグル族でもウルムチ市内居住と南疆では大きく異なる。国は古蘭經（コーラン）に基づき計画出産を宣伝しようと宣伝用教材を作成するが容易ではない。回族、ウイグル族、東郷族^{トンシャン}、キルギス族、撒拉族^{サラ}、哈萨克族^{カザフ}、タジク族、ウズベク族、タタール族、バオアン族

などがある。

第2はチベット仏教。12世紀に生まれ最も勢力を保持する派の黄教＝ラマ教は教則により生涯結婚が許されていない。生涯独身率、不育率、性比の不均衡、生産責任制導入以後一妻多夫の再増加などが特徴である。チベット族、土族、珞巴族、門巴族、裕固族、普米族などが属すが正確な出生率の値が調査上なお把握しにくい。

第3は西南の貴州、雲南、広西壮族、海南、四川などに居住する瑶、苗、侗、布依、黎、彝、傣、白族など。一口に瑶とか黎といってもその下位にくつかの支系があり、習俗・慣習を異にして系をこえての通婚は禁止されていたケースも多い。一般に出生率が高い。山の高度によって各民族は住みわけていることが多い。雲南麗江納西族自治県の納西族は、訪妻婚型の母系社会をなお残していることで知られている。

第4は東北のはろびゆく最少人口の民族で漢族との通婚によって人口こそみかけ上増大しているが、本来の民族血統と伝統が消滅しかけている。本稿で紹介した黒龍江省ソビエト国境沿いのオロチョン、ホジェン、ダフル族がそれに属する。

第5は東北、遼寧省の満族、錫伯族、貴州省の仡佬、土家族に代表される戸籍変更による人口急増の民族。歴史上の民族軽視・冷遇の背景と近年の民族識別工作が影響する。集団的戸籍変更による自治県成立の例などもある。

第6は、出生率が漢族より唯一低く、教育程度も漢族より高い。かつ民族としての独自性を維持する朝鮮族である。

中国における少数民族人口政策の今日のポイントは、①計画出産（計画的に生み育てる）を堅持すること、②一人っ子政策をとるのは不可能、③人口資質・民族素質の向上、の3点である。重要なことは、55の民族それぞれの問題が異なっているという独自性の認識であり、その周知が政策実施や調査実施にあたり充分配慮されなければならない。

さらには各々民族の特色にいかに対応した生産様式をみいだすかということがその民族の向上・繁栄にとって原点となる。従来は、国家は金銭上の援

助を中心に（近年は計画出産と大学進学上の優遇政策が特に意味が重い）実施してきたが、その民族に適した生産様式をみだしていき、その実態に即した婚姻、出産、死亡等が分析されていく必要がある。いずれにせよようやく少数民族人口研究はスタートにたった段階であり、今後にはかりしれぬ問題の広がりや深さが存在している。

〔注〕

- (1) チベット自治区は「婚姻法補足（融通）条項」（全8条）を1981年4月18日に制定した。第1条で結婚年齢は男満20歳、女満18歳と2歳引下げ、第2条は「一夫多妻、一妻多夫等の封建的婚姻を廃止する。ただし、本条例の執行前に上述の婚姻関係を形成した者で、およそ婚姻関係を主体的に解除しない者については維持することを許可する」としたが、生産責任制導入以降一妻多夫（その約9割は“兄弟一妻婚”、残るは「父子同妻」か夫が友人のケース）の比率が増大したといわれる（ある地域では60%）。第4条「宗教の婚姻家庭への干渉禁止」、第6条「非婚者が生んだ子女の生活費や教育費の負担に対しては、生母が負担する習慣は改めるべき」と規定されている。詳細は拙稿「中国少数民族の人口研究序説」（『人口問題研究』第186号 1988年4月）、拙稿「最新中国人口事情——1990年人口センサスと少数民族人口」（『人口問題研究』第47巻第2号 1991年7月）を参照。
- (2) 林盛中『中国鄂倫春民族人口』ハルビン 黒龍江人民出版社 1989年、沈斌華・高建綱『鄂倫春族人口概況』フフホト 内蒙古出版社 1989年。
- (3) 肖振禹・劉小治「中国四個地区三個民族的婦女婚姻生育調查概況」（中国社会科学院人口研究中心編『中国人口年鑑 1987』北京 中国経済管理出版社 1988年）671～683ページ。